

PS1-708 胸部・腹部肉腫の外科治療の取り組み

波多江 亮^{1,3}、波多江 亮^{1,3}、高橋 真治¹、丸山 正二^{1,3}、大野 烈士^{2,3}、長田 功¹、江里口 正純^{1,3}
公益財団法人結核予防会新山手病外科¹、医療法人社団 相和会 淵野辺総合病院 外科²、
キュアサルコーマ共同治療連携³

肉腫は腹部外科領域では時に遭遇する比較的まれな腫瘍である。固形腫瘍の中で約2%を占め、その25%が腹部内臓、25%が後腹膜に発症するとされている。治療の原則は外科的完全切除であるが、腹部肉腫は癌腫や四肢の肉腫と比較して自覚症状の発現が遅く、診断時の腫瘍径が大きく完全切除が困難な例も多い。その一方で化学療法や放射線治療など手術以外の治療法も確立したものが少なく、初回手術で切除不能となった症例では治療に難渋しているのが現状と考えられる。当院では2007年4月から2011年12

月の期間、キュアサルコーマ共同治療連携の一員として再発症例を中心に150例の胸部・腹部肉腫手術を施行した。症例の平均年齢は50.2歳、平均手術時間は4時間31分、平均出血量は2300gであった。組織型は平滑筋肉腫が最多で、脂肪肉腫、悪性繊維組織球腫(MFH)がそれに次いだ。手術は再発例であっても完全切除を目標に行っているが、肉眼的完全切除が不可能な例でもサルベージ(減量)手術を行い、消化管・尿路の確保、切除検体からの遺伝子検索等を行うことで手術後の他治療に繋げている。当院での肉腫手術の取り組みと短期成績を報告する。